The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | Soft Palate Mucosal Adhesion as a Preparation for Furlow's Double-Opposing Z-Palatoplasty |
| Author(s) | 大山, 知樹 |
| Citation | 大阪大学, 2007, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/48910 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【37】

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 大　山　知　樹（おお　やま　とも　き） |
| 博士の専攻分野の名称 | 博　士（医　学） |
| 学　位　記　番　号 | 第　２１４８７　号 |
| 学位授与年月日 | 平成 19 年６月 20 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第２項該当 |
| 学　位　論　文　名 | Soft Palate Mucosal Adhesion as a Preparation for Furlow's Double-Opposing Z-Palatoplasty<br>（ファーロー法による口蓋形成のための軟口蓋癒着術） |
| 論　文　審　査　委　員 | （主査）<br>教　授　細川　　亙<br>（副査）<br>教　授　久保　　武　　教　授　福澤　正洋 |

## 論　文　内　容　の　要　旨

［　目的　］

口唇口蓋裂は約 500 人に１人の割合で発生する頻度の高い先天奇形である。その手術は整容面だけでなく、発声・咀嚼・咬合など機能面の獲得を目指すもので古くから現在に至るまで改善・改良がほどこされてきた。そのうち口蓋裂手術においては、言語機能の獲得と手術瘢痕による上顎の成長障害との両立が積年の課題となっている。1986 年に発表された Furlow 法による口蓋形成術はそれらを克服すべく開発された画期的な術式であるが、いくつかの短所を有する。患者負担を増やすことなく簡便な方法により Furlow 法の欠点を補うべく本法を施行し、その有用性について検討した。

［　方法ならびに成績　］

口蓋裂はその裂隙の幅が広いほど、手術侵襲が大きくなり長期的な顎成長の障害因子となるだけでなく、術後言語成績も思わしくない。そこで口蓋裂手術に先だって行われる口唇裂手術の際に、口蓋粘膜の一部を癒着しておくことにより、裂隙の狭小化と口蓋組織の拡張化を図ってから口蓋形成術を行った。患者家族の同意のもと 13 例に本法を施行した。全例において裂隙の狭小化がえられ、上顎骨の成長点に瘢痕をつくることなく Furlow 法による口蓋形成術を施行することができた。術前・術後の上顎の石膏模型を採取し、裂隙の幅、顎成長について、対照群と比較検討した。本法施行群では対照群と比較し有意に裂隙の幅が狭くなっていた。上顎の幅径は対照群と有意差なく、ほぼ同時期健常児と変わりなかった。全例において簡便な検査法による短期的な言語成績は良好であった。裂隙の狭小化により、手術侵襲も小さく、成長点に瘢痕を形成していないため長期的にも良好な上顎成長が予想された。

［　総括　］

Furlow 法による口蓋形成術は 1986 年の発表以来、従来法よりも良好な言語成績の結果が報告されているが、その術式の特徴から裂隙幅の広い症例では上顎成長に関する優位性の報告はみられない。本法は手術回数を増やすことなく、短時間かつ簡便に施行でき、裂隙の狭小化がえられた。それにより、上顎骨に対して低侵襲の口蓋形成術を施行することができ Furlow 法による口蓋形成術の欠点を克服できた。付加した点は口蓋粘膜の一部癒着だけなので、長期的な言語成績は従来の Furlow 法と同等の結果が予想される。

## 論文審査の結果の要旨

口蓋裂治療に対し、1986年にFurlowは軟口蓋部でのZ形成により従来法よりも低侵襲な再建法を開発した。この術式による手術を受けた患児では良好な言語成績が報告されているが裂隙の広い症例においては上顎成長に関する優位性はみとめられていない。そこであらかじめ口蓋粘膜の一部を癒着しておくことにより、裂隙の狭小化と口蓋組織の拡張化を図ってから口蓋形成術を行う術式を開発した。術前・術後の上顎の石膏模型を採取し、裂隙の幅、顎成長について、対照群と比較検討した。本法施行群では有意に裂隙の幅が狭くなり、低侵襲のFurlow法が施行できた。上顎の幅径は対照群と有意差なく、ほぼ同時期健常児と変わりなかった。短期的な言語成績は良好で、成長点に瘢痕を形成していないため良好な上顎成長が予想された。本法は、手術回数を増やすことなく、短時間かつ簡便に施行でき、上顎骨の成長に関するFurlow法による口蓋形成術の欠点を克服できたといえる。この研究は口蓋裂治療の新しい術式の考案とそれに対する臨床評価を科学的に行ったものであり、学位の授与に値すると考えられる。